

歴史社会言語学的視座から見た言語の多様性と国際理解

Linguistic Diversity and International Understanding:
From the Perspective of Historical Sociolinguistics

H29海人2

派遣先 ザルツブルク大学(オーストリア・ザルツブルク)

期 間 平成29年11月21日～平成29年12月2日(12日間)

申請者 京都大学 文学研究科 教授 家 入 葉 子

海外における研究活動状況

研究目的

20世紀後半以降、言語研究におけるコーパス(電子化された言語資料)の使用が標準化し、さまざまな言語の研究において、その多様性が注目を集めるようになった。英語はグローバル化が最も進んだ言語の一つであるため、同時にその多様性についての研究も多い。イギリス英語とアメリカ英語はもとより、スリランカの英語、シンガポールの英語、など多様な変種についての研究成果が次々に報告されている。しかしながら、その成果が国際理解や英語教育の場面に活かされているかという点必ずしもそうではない。また、多様性の存在はどの言語にも共通であるが、異なる言語を専門とする研究者間での情報交換は必ずしも進んでいるとはいえない。本研究では、英語の多様性についての研究を継続的に遂行してきた家入が、ドイツ語の多様性についてのさまざまな研究プロジェクトで中心的な役割を果たしているザルツブルク大学のStephan Elspaß教授、およびその関係者と研究交流を行うことで、異なる言語を研究対象としながらも言語の多様性と変化という共通のテーマに取り組む研究者間のネットワークの構築を目指すものである。Stephan Elspaß教授がヨーロッパで展開してい

る歴史社会言語学関連の取り組みと、我が国で平成29年3月に初めて開催された歴史社会言語学・歴史語用論研究会(学習院大学・高田博行教授主催)との連携をうながし、英語・ドイツ語・日本語など複数の言語を巻き込みながら、言語の多様性についての理解を通じて、国際理解のあり方そのものへの働きかけを行うことを目的とする。

海外における研究活動報告

2017年11月21日から12月1日(12月2日帰国)までオーストリアのザルツブルク大学に滞在し、同大学ドイツ語学科のStephan Elspaß教授、および関連の研究者と歴史社会言語学に関する研究交流を行った。近年注目されるようになってきた歴史社会言語学(言語と社会のかかわりについての通時的研究)が、英語、ドイツ語、日本語、といった個別の領域で新たな展開を見せる中で、言語の違いを超えた情報交換をはかり、その成果を言語教育や国際理解の展開にも寄与することが目的である。このため、申請者の専門領域は英語であるが、今回の滞在中では、あえて滞在先をドイツ語学科とした。

Elspaß教授は、現在、ウィーン、グラーツ、インスブルックなど、各地の研究者と協力しながら、オーストリアにおけるドイツ語の実態を記述する複数のプロジェクトにおいて

指導的な役割を果たしている (SFB Deutsch in Österreich. <https://dioe.at/>参照)。ドイツ語はもとも、ドイツ、スイス、オーストリア等、国境を超えて母語話者が広がっているために、多様性が強調される言語の一つであるが、オーストリア単独でも、その多様性は顕著である。Elspaß教授のプロジェクトは、この多様性の中にむしろ新たな可能性を見出すことを意図する。

ザルツブルク滞在中は、Elspaß教授をはじめ、ドイツ語学科で社会言語学や言語教育の問題に取り組む研究者と議論を行い、申請者の専門である英語の場合との差異および類似性を検討した。英語は、現在では世界各地で第一言語、第二言語として使用されているため、その多様性は研究の前提となっている。しかしながら、言語教育の場面では、この多様性についての考え方が必ずしも活かされているとは言えず、現代英語が変化の一過程を映し出すものであることも、意識されないことが多い。人々と言語のかかわりについては、言語の違いを超えて共通部分も多いことを確認し、Elspaß教授がヨーロッパで展開する歴史社会言語学のネットワークと我が国の歴史社会言語学者との定期的な交流、我が国での国際学会の開催および異なる言語の事例を含む論文集の編集等についての予備的な構想に至った。

さらに今回の滞在中には、上記のような学問分野全体にかかわるような議論のほか、具体的な研究成果についての議論や学術交流も行うことができた。たとえば11月24日の午後、インスブルック大学に出向き、English Dialect Dictionary Online (= EDD Online) プロジェクトを視察した。方言地図の作成は伝統的な学問分野であるが、それを電子化し、歴史社会

言語学の視点から捉え直す試みは近年のことであり、インスブルックではManfred Markus 名誉教授を中心に、EDD Online プロジェクトが進められている。本体はすでにインターネット上でアクセスが可能 (<http://eddonline-proj.uibk.ac.at/edd/termsOfUse.jsp>) であるが、インスブルックでは、さらに新しい未公開版を試すことが可能であり、プロジェクトの最新情報に触れることができた。

また11月29日にはElspaß教授が招聘したElke Ronneberger-Sibold教授 (<http://www.ku.de/slf/germanistik/deutschsprawi/ehemalige-lehrstuhlinhaber-u-vertreter/prof-i-r-dr-elke-ronneberger-sibold/>) の最新の研究成果についての講演会に参加し、研究討議を行った。研究成果はドイツ語の名詞の語尾が変化したプロセスを明らかにする試みで、多数の研究者および学生を交えての研究交流となった。地域性とのかかわり、言語変化の際に働くメカニズムについては、英語との比較も可能で、文法性の消失 (古英語では存在した男性名詞・中性名詞・女性名詞の消失) などと関連づけながら、英語・ドイツ語の視点から議論を深めることができた。ここでも変化の過程で生じる言語の多様性が議論の中心となり、現在の言語と歴史を連続的に捉えることが重要であることが確認された。

今回のザルツブルク滞在の成果は、2017年に我が国で初めて開催された歴史社会言語学・歴史語用論研究会 (HiSoPra) の研究者グループとも共有しながら、将来的にヨーロッパと我が国の研究者グループの交流につなげていきたいと考えている。HiSoPraの第2回大会は、2018年3月に開催の予定である。